

ナスカに出会う

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6681

博物館見学実習報告

6月21日、多くの観覧客でにぎわう石川県立美術館にて見学実習を実施しました。学部生2名による見学レポートを掲載します。

ナスカに出会う

笠井智仁（文学部史学科考古学専攻3年）

考古学実習の授業時間を用いて、石川県立美術館『世界遺産ナスカ展—地上絵の創造者たち—』を見学する機会が設けられた。

会場の入り口付近ではマルチメディア音声ガイドを有

料で貸し出していた。値段については学生間で否定意見があったが、特別展は概して収益を必要とするものであり、利用も任意であるため私は妥当なものだと思う。会場全体は、展示室3室とその間の通路から成っている。順路指示板などの不備がみられたが、単純な配置であり推測はしやすい。

入場してすぐの第1展示室は、ナスカの自然、日常生活、ナスカ人の姿について、土器、繊維製品、ミイラなどからアプローチする内容となっていた。ここではテレビを用いて布に包まれていたミイラの開梱作業を紹介しており、来場者の中にはこれをみて小さく歓声をあげる人もいた。

第2展示室は第1展示室から通路を挟んで向かい側で、ナスカ人の姿、音楽、神々、戦争、性表現について、人骨、土器、楽器、死者を包むマント、金製品から触れていた。ここには土器の展示台を回転させる工夫が見られた。しかし外科手術痕の紹介のため展示してある頭骨の中には、手術痕が見えない方向に向いているものもあり、こちらも回転台の使用など工夫をするべきだと思われる。

第3展示室は地上絵を扱うフロアである。床には照明によって地上絵の図像が映されており、奥にはシアターが設けられ、パンパのジオラマや実物の礫、地上絵の体感レプリカなどが置かれていた。シアターではバーチャルリアリティでパンパを空から眺める映像が上映された。

会場を回っていて個人的に気になった点は、第1展示室に入ってすぐのところ土器が年代順に並べられているのだが、それが時代を遡る並び方である(順路に沿って時代が下る方が見やすいのに)こと、照明が遺物前面に陰を作っていること、製作方法については触れられていないこと、地上絵に関する展示がインパクトに欠けることなどであった。また、展示ケースには指紋や皮脂の付着が見られ、来場者のモラルも気になるところである。

ナスカ文化は、南米ペルーに紀元前100年ごろから紀元後700年ごろまで存続したが、文字を持たない文化であったため、今も謎が多いと聞いていた。ただ、乾燥した地域であるために数多くのミイラや遺物が残り、またその色彩も鮮やかに保存されている。そのため土器などに描かれた図像から、当時の様子が少なからず読み取れる。服装、ココの使用、数々の楽器を用

いた儀式、盛んな戦争と首級の扱い、動物や神々の認識など、文字がなくとも分かることは多いようである。図像ばかりを扱うということで一般の来場者も分かりやすいのではないだろうか。会場のいたるところで頷きや小さな感嘆を見たように思う。

ナスカ展は、TBS アンデスプロジェクトの第3弾であり、全国を回る巡回展である。地上絵と言えば、世界8番目の不思議とも呼ばれる有名な遺跡であるから、おそらく全国で多くの人々が会場に足を運んで、ナスカ文化に触れていることだろう。今後プロジェクトによる更なる研究で歴史の空白が埋まってゆくことを期待したい。